

それでは定刻になりましたので始めさせていただきます。

本日はお忙しい中ご参加いただきまして誠にありがとうございます。

これより、令和5年度スマート介護施設モデル事業成果報告会を始めさせていただきます。

初めに、開会の挨拶を行います。

お願いいたします。

はい。

埼玉県高齢者福祉課の新保と申します。

本来であれば、高齢者福祉課長の播磨がご挨拶するところでございますけれども、急遽所用が入りましたので私は課長の挨拶を代読させていただきます。

よろしく申し上げます。

本日はお忙しい中、スマート介護モデル事業成果報告会にご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

まず皆様には、日頃から本県の高齢者福祉の推進に多大なご尽力を賜っておりますことに、この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。

また、4年に及ぶコロナとの戦いの中で、高齢者の命と生活を支えるため、5類移行後も強い緊張感を持って業務を継続していただいていることに深い敬意と感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

本当にありがとうございます。

今年は1月1日に能登半島地震が発生いたしました。

現地では今も厳しい状況が続いております。

いち早く応援派遣にご協力をいただいている事業者には、改めて御礼を申し上げます。

ありがとうございます。

国からは、さらなる支援要請も来ているところございまして、県としても、できることをしっかりとやっていかなければならないと考えております。

引き続きお力添えをお願いいたします。

さてこれから、スマート介護施設モデル事業の成果報告及び意見交換会を実施させていただくわけでございますが、スマート介

介護施設モデル事業は、介護施設が、コンサルタントの協力のもと、介護ロボットやICT機器を活用して、業務改善を図り、その成果を他の施設へと普及させることを目的として、令和3年度から開始した事業でございます。

モデル施設として、今日まで取り組んでこられたグループホーム喜楽里様、グループホームほほえみ様、そして、コンサルタントとして、モデル施設を支援してくださった株式会社NTTデータ経営研究所様から、他の施設の参考となる具体的な事例をお話いただけます。

どうぞよろしくお願いいたします。

急速に進む高齢化によって、介護需要が高まる一方、労働人口の減少により介護人材の大幅な不足が見込まれております。本県では、このような課題を解決するために、介護ロボットやICTなどを効果的に活用して、職員の負担を軽減し、働きやすい職場環境づくりを進めていくことが重要であると考えております。

なお、厚生労働省は、令和6年度の運営基準の見直しの中で、生産性の向上等を通じた働きやすい職場環境づくりとして、利用者の安全、並びに介護サービスの質の確保及び職員の負担軽減に資する方策を検討するための委員会の設置を義務づける方針を示しております。

介護現場における効率化や省力化に生じた時間を利用者とのコミュニケーションに充てたり、介護ロボット、例えば見守りベッドセンサー等の導入により、タイムリーに排泄介助を行ったりすることは、介護の質の向上に繋がります。

運営基準の見直しを先取りしたといえる、本事業のモデル施設は、いわば本来の介護施設のあるべき姿といえます。

ご参加いただいている施設におかれましては、介護ロボットやICTを活用した業務改善を実施する際に、ぜひ参考にいただければと存じます。

成果報告会を通じて、気になった点がございましたら、最後にご案内する、問い合わせ先までご連絡をいただければと存じます。

時間も限られておりますので、早速発表に移りたいと思います。

それではモデル施設の皆様どうぞよろしくお願いいたします。

はい、ありがとうございます。

それでは、令和5年度のモデル施設2施設から事業の取り組み成果についてご発表いただきます。

はじめに、グループグループホーム喜楽里 松永様より発表いただきます。

よろしくお願いいたします。

はい。

ただいまご紹介いただきました、「グループホーム喜楽里」管理者の松永敏と申します。

よろしくお願いします。

今回の取り組みですが、タイトルとしまして、「介護ロボットとともに質の高いケアを提供したい」。

それでは、発表させていただきます。

施設の概要です。

開設が平成17年3月、ということで、今月で19年が経ちました。

2ユニット18名となっております。

日常の1コマ、これはですね、理念の中にある「できることへの支援」が顕れた写真が載っています。

次に取り組み全体の流れとしては、大きく三つのステップに分けました。

準備期、導入前期、導入後期。

まず準備期ですが、プロジェクトメンバーを立ち上げました。

意見に偏りが出ないように、プロジェクトメンバーを八名で構成しました。

そして、実施体制の準備ですが、苦勞した点を挙げました。

メンバー8名中5名が介護職ということで、全員のミーティング参加や、同時の情報共有が大変難しいものでした。

工夫したところ。

会議ごとに議事録を作成し、ミーティング参加できなかった方には、後日、議事録を共有しました。

また、コミュニケーションツール「Chatwork」を導入することで、円滑な情報共有を目指しました。

そして課題を見える化するため、因果関係図の作成をしました。

まず、職員の声を気づきシートに書いて、課題の洗い出しをしました。

そして、課題の観点三つ。ムリ、ムダ、ムラなことを元に再度検討しました。

そして特に声が多かった、二つの点を課題に取り組みました。

課題の1として、夜間帯は1人体制だが、既存のセンサーだと誤報が多く、訪室が負担ということで、深掘り原因として、既存のセンサーが簡易型で、性能が悪いため、頻回になってしまうということ。

時にはこのセンサーが、電池切れでならなかったということもありました。

そして、課題の2としては、訪室をしないと、居室内は何が起こっているかわからず、緊張してしまう。

ということで、深掘り原因としては、転倒や体調不良に気づくことができないので不安になる、ということ。

結果として、夜勤者の疲労が蓄積される。

また、悪影響としては、身体的精神的負担が大きいということで、「夜勤を減らしてください」という声も届くようになりました。

この課題解決の打ち手として、テクノロジーを活用することになりました。

そして、介護ロボットの見守り支援機器を使ったら、居室内の利用者の様子がわかるようになるということで、期待できる効果として、職員の身体的、精神的負担軽減に繋がる。

また、利用者の生活の質向上に繋がるのではと考えました。

そして、導入の計画づくりです。

機器にどのような機能があると効果を期待できるか、検討を行いました。

機器の選定基準としては、「居室内の情報がわかる」「体調変化や異常を察知できる」「利用者の睡眠を妨げないで訪室ができる」「転倒を察知した訪室ができる」、この4つを選定基準としました。

また、機能以外にも考慮すべきポイントは何かということで、「予算に合った価格である」「機器の導入時や、不具合発生時における迅速丁寧なフォロー体制がある」「適切な納期スケジュールである」「センサーやカメラの感度が良く、誤報が少ない」、という点もポイントとして考えます。

機器情報の収集ですが、いろいろと見比べ、最終的に4社の機器情報の収集を行いました。

選定時のポイントとしては、5つ挙げましたが、特にこの2番の因果関係作りで洗い出した課題に何度も立ち戻りながら選定する。

また、5番のプロジェクトスケジュールに影響しないよう、デモの期間と納期に注意して、スケジュール設計を行いました。

特にこのポイントは、大変苦労しました。

そして福祉機器展の見学と、過年度のモデル施設を見学に行きました。

やはり、カタログだけでは実物がどのようなものかわからないということで不安になる、ということで、不安解消のために、メンバーがですね、分担して、実物を見ることにしました。

まず最初に、介護スマイル館見学。

そして、福祉機器展への見学。

そして、令和3年度モデル施設のところにも、見学へ行きました。

展示されているものが見られたことで、少しずつ不安が減ってきました。

特に爽風館様への見学では、実際に使用中の「aams」を拝見させていただいて、とても参考となるお話、また、貴重な資料までいただき、抱えている不安が少し解消され、大変ありがたかったです。

試行的導入の準備です。

やはりカタログやインターネットなどから情報収集した広報より、4つの機器を選び、それぞれ約1週間デモを実施しました。

その中で、アンケートからも、カメラの必要性を特に感じました。

ここからは導入前期に入ります。

デモ機器のアンケート調査の結果より、全体の平均点を出して比較したところ、「aams」に決定しました。

「aams」は、画面が見やすいという声が多くて、全体でも評価でした。

対象者の選定ですが、各ユニットからそれぞれ1名ということで、計2名の方を選定することになりました。

基準判断として、居室内での転倒の事故、ヒヤリハット報告書が多く出ている方、ということで、あまり時間をかけずに決めることができました。

次に、利用者や家族への説明と、同意を得るために、説明の文書を作成しました。

同時に、同意書も用意いたしました。

説明時のポイントを挙げています。

機械の安全性を丁寧に説明するようにしました。

また、転倒による事故予防にも繋がり、そして、費用負担はない、という説明を丁寧にしました。

そして、アクションプランですが、これについては、スタッフが迷わずに、センサーが反応後対応ができるように、見守りアクションプランを作りました。

「aams」の使用手順を、わかりやすく表したものです。

導入前期で苦労した点としては、これはデモの時からですが、通信環境については、WiFi接続が良いスポットがあるという点。

工夫した点としては、アクセスポイントを増設しました。

また、アクションプランについては、試行的にアクションプランを作りましたが、流れだけなので、操作が分かるようにもっと具体的なものが欲しいということで、工夫した点として、対象者別に個別のアクションプランを作りました。

そして、KPI歩数の計測についてですが、うっかり計測を忘れてしまうということがあり、正確なデータにならない、ということで、工夫した点としては、歩数計測の張り紙をするなど、職員同士がお互いに声掛けをして、計測を忘れないように努めました。

ここから導入の後期に入ります。

対象者別の個別のアクションプランを作りました。

1人目の方ですが、ほとんどの時間を居室内で過ごすという方のアクションプランです。

2人目の方ですが、安静の指示が出ている方のアクションプランです。

モニターによるアイコンで操作手順を作って、わかりやすくやってみました。

ここから機器の設定で工夫した点を紹介します。

対象者にあった機器の調整が必要ということで、アクションプラン通りに動いていても、タイミングがずれているとか、異常は見られないが何度もセンサーがなるとか、閾値に見直しが必要でした。

また、明らかな誤報については、メーカーに問い合わせをして、助言をいただきました。

小さな成功事例を紹介します。

入院レベルで安静の指示が出ている方が、自力で動いてしまうため、離床センサーや映像を見て、速やかに対応ができたこと。

また、感染症に罹患して、居室内に隔離していた方が、軽症で何度も出てこようとするため、センサーと映像を見て、居室内にとどまっていたことができ、感染拡大防止に貢献できて、これは大変よかったです。

導入後期で苦労した点を挙げています。

これはたくさんあったのですが、その中でも、日中の端末アラートが発報された時、誰が対応するか決めていない。誰かが対応してくれる。また、発報がわかっても、手が離せない時や屋外にいることもあり、職員間で状況を伝える手段がない。

ということで、工夫した点として、具体的なルールを決めて、マニュアルに追加する。そして、日勤者がアプリを入れた業務スマホ、携帯して、対応する。

ということで、現在はアプリを入れて対応を取れています。

導入の成果です。

職員からの感想をいただきました。

身体的精神的負担について、機器が見えない部分をカバーしてくれることで、介護に自信が持てるが、最後は人の目で判断したい。

対象者への効果について、ご家族に、転倒防止や、体調管理等について、データが理解を得る材料となり、職員に対する安心と信頼に繋がると思う。

対象者の状況把握については、訪問新病院にも、生体情報や睡眠の状況をデータとして提示することができる。

といったコメントがありました。

KPIの測定結果です。

夜間の訪室回数を表しています。

令和6年1月26日に、「aams」を2台設置しました。

そのあとは、徐々に機器の利用に慣れて、訪室回数は減少していきました。

転倒に関するインシデント、ヒヤリハットの回数です。

転倒事故は半分に減少していきました。

これについては、アラートで危険予測ができたと考えられます。

介護中の事故に対する不安についてですが、機器の導入前は、入居者の急な体調の変化や、転倒、打撲、内出血等の事故に対する不安感が大きかったのですが、導入後は、不安の軽減が見られて、大変よかったです。

そして副次的な効果として、機器の設定をしたことでスタッフルームの整理整頓が進んだこと。

また、置き場所にも戸惑わなくて済むという、効果がありました。

理事長からのコメントをいただいています。

紹介します。

認知症高齢者グループの介護職員にとって求められているサービスは、利用者様に寄り添い、利用者様の笑顔をつくることです。

これは、計画に取り組む前に目標として示した一文です。

そして、ロボットの導入を進めた現在、プロジェクトメンバーは、苦労を経験した後の、良い顔になっています。

アドバイザーの的確な助言のもとでしたが、多くの経験と苦労をしたようです。

特に、最新のロボットに触れられたこと、それらの新しい用語と用法、グループホームの現場を想定してのたくさんの議論、何より

も、自分たちがこれを使うのだという信念を持っての導入ステップは、外から見ても、とても頼もしいものでした。

導入の完成お疲れ様でした。

でも、これからが本番でしょう。

経験を重ね、職員全員がロボットを力強い味方にしなければなりません。

利用者様の笑顔に繋がること、私も応援したいと思っています。

頑張りましょう。

最後にまとめになります。

このプロジェクトを通じて得た学び、感じたこと、新しいことへの挑戦であり、不安や心配が尽きぬ中、介護現場を知る伴奏者の存在は心の支えでした。

これからは自分たちで試行錯誤を重ね、安心、安全で進化した介護を提供していきたいと思います。

施設としての今後の方針は、これはたくさんあったのですが、今後、台数を増やす予定なので、定期的な研修と、転倒転落アセスメントシートの作成、マニュアルの見直しを行い、半年後には職員全員が苦手意識なく、「aams」を使いこなして、負担軽減を目指したいと思います。

「いつまでも、きらびと」。

ご清聴ありがとうございました。

松永様ありがとうございました。

続きまして、グループホームほほえみ大極様より発表していただきます。

よろしくお願いいたします。

ただいまご紹介に預かりました。

社会福祉法人杏珠会が運営しております「グループホームほほえみ」で管理者をしております大極と申します。

本日は、よりよく認知症と向き合うために、テクノロジーを活用するというテーマで、発表させていただきます。

何分不慣れですので、お聞き苦しい点もあるかと存じますが、よろしくお願いいたします。

まず少しだけ施設の説明をさせていただきます。

グループホームほほえみは、2019年3月に開設された地域密着型認知症対応型共同生活介護事業所となります。
定員は2ユニット合計18名となっており、今回、令和5年度埼玉県スマート介護モデル事業を実施させていただきました。

職員の総数やご入居されている方の情報は、ご覧いただいているスライドの通りとなっております。

埼玉県スマート介護施設モデル事業とは、介護ロボットやICTなどのテクノロジーを効果的に活用して、介護の質の向上を図るとともに、職員の負担軽減や働きやすい職場環境づくりを進め、それを実現し、今後の県のモデルとなる介護施設の姿を示すことで、他の施設に普及させていくことを目的として実施される事業です。

コンサルテーションとして、様々な実績をお持ちのNTTデータ経営研究所の方が伴走支援をしていただき、初めての会合では、事前に全職員から集めた気づきシートを整理し、緩やかな因果関係図というものを作成して、組織の課題を見える化しました。

そこで、私たちほほえみの課題は、転倒事故とセンサーやナースコールの誤報による業務の煩雑さと改めて気づくことになります。このように様々な気づきの中から自施設の業務改善をしていく経験ができる、貴重な事業体験となっています。

そこで本日皆様にお伝えしたいことは、私たちが実施しました、このモデル事業を通じて学ぶことができた、介護ロボットを適切に導入し定着するための9つのステップについて、そのプロセスがどのように進められたかをお話したいと思います。

まずはステップですが、大きく分けて準備期、導入前期、導入後期、三つの期間になります。

なぜ9つのステップに分類されているかといいますと、介護ロボットの導入を成功させるには、現状課題や、求める機能の一つ一つをひもとき、見える化し、共有するということが必要不可欠となります。

その部分を実践するためのステップとなるということをご理解いただければと思います。

スライドは、介護ロボット導入に際して、実際に行った9つのステップに沿った改善の流れです。

現場中心のプロジェクトチームを立ち上げ、組織として介護ロボット導入に向けて合意形成していきます。

そして、気づき事から、因果関係図を作成し、組織の課題を見える化。

ロボットで解決できる求める打ち手を決定しました。

その後、機器のデモと選定、既存のオペレーションの見直しとマニュアルの作成を実施します。

さらに検討することで見えた不都合なオペレーションを再度見直し、リスクを分析して、必要な研修を全員実施後に、試行的導入にて職員が使用を体験します。

その後、職員が使用するためのムラをなくすため、機器が示すアイコンに沿ったアクションプランを作成し、導入しました。

そのアクションプランが定着したところで、小さな成功体験を集めて共有できるように、KPIを測定し、課題が改善したかを見える化して、使用の定着化を成功させていきます。

今回の授業ではほえみが目指すべき姿と現在の課題。

想定される解決策として、介護ロボットに求める機能を記載してみました。

これらの機能を持つ機器と、実施設のオペレーションを見直すことで、目指すべき姿を実現する活動がスタートしました。

とはいえすべてが初めての経験でしたので、NTTデータ研究所の方の計らいで、まずは令和3年度と令和4年度に、スマート介護施設モデル事業を経験されました特別養護老人ホーム様と、特定施設入居者生活介護施設様に、見学とヒアリングにお伺いさせていただき、グループホームとして私たちが目指す事業実施の道しるべとさせていただいております。

私たちほえみの課題は、転倒事故とセンサーやナースコールの誤報による業務の煩雑さということで検討した結果、より精度の高い見守りセンサー型介護ロボットの導入に動くこととなりました。

しかし介護ロボットについては素人同然の私たちでしたので、まずは、埼玉県社会福祉協議会様が実施している介護ロボット貸出事業のリストから、いくつかの期待を検討してみることにになりました。

その中から、実際に実技に触れてみたい機器を機能分析から5つまで絞り込み、メーカーの方にデモを実施していただく運びとなりました。

準備期に実施した実施体制の整備です。

ほえみの職員総数は17名ですので、比較的モデル事業に名乗りを上げることに、全職員で合意形成することはできていたと考えています。

そこで、プロジェクトの中核メンバーを管理職、リーダー職、一般職より決めて、得意分野を生かせるような担当制で進むことにしました。

また、プロジェクトの進行具合は細かく全職員に伝えることも、ルールとして実行していきました。

準備期で工夫したことになります。

先ほど職員総数は17名と申しましたが、職員に意見を求める際に、書面だけでは小さい声を拾うことまではできませんでした。

そこで、中核メンバーを中心に個別に声をかけ、本音の部分聞き、意見交換することで、一つ一つ合意形成をしていくことを大切にしました。

また中核メンバーは4名とはいえ、通常業務に入りながらの実施だったので、対面での意見交換には限りがありました。そこで、ICTツールを活用しての意見交換が、相互理解を深めるためにとても役に立ちました。

9つのステップごとで、簡単に私たちが感じた重要なことをまとめてみました。

準備期では、ロボットありきではなく、現場の実際に使用する人の声を多く取り入れることが大切だと思います。実体験ですが、トップダウンでは温度差が生まれてしまい、うまくいきません。介護ロボットの導入も、職員同士の相互理解が大切になります。

準備期では、緩やかな因果関係図を作成し、課題の見える化から、転倒事故とセンサーやナースコールの誤報による業務の煩雑さが問題であるとチームで合意形成をしましたが、その後、導入前へと移り、導入計画書の作成に取りかかることになりました。

導入計画書には、今回のプロジェクトの目的や意義はもちろん、チームメンバーとその役割や、予想する機器とその特性、導入スケジュールや、オペレーションの変更、KPIの測定目標など、様々なことを記載していきました。

そしていよいよ介護ロボットの選定になり、最終選考で5機種にまで絞り込み、デモ使用実施後に全職員にアンケートを実施しています。

その結果と、私たちの求める機能が合致したことで、新型の「眠りSCAN」の導入を決めています。

そして、機器の導入後、試行的導入期間として、すべての職員に使い方研修を実施していくことになりました。

こちらが実際に、デモを実施した機体になります。

実際にデモを使用させていただきますと、期待値との相違が使い勝手、求める機能など、様々な違いが見えてきました。そこから全スタッフにデモでの使用感をアンケートして、それぞれの利点と改善点が見える化し、機器選定のための指標を作りました。

そして5機種の中から、職員のグーグルフォームを使ったアンケートを実施しています。

グーグルフォームを使ったアンケートの結果です。

デモの期間に夜勤に入らなかった職員もいましたが、4つの設問で得点が低いものが使いやすさが上位、というアンケートを実施し、比べてみました。

数字的にはどの機種も大きなアドバンテージはないような結果でしたが、「生体センサーの有無」「離床センサーの反応速度」「カメラ機能」「メーカー担当の対応」「システム一式の価格」「クラウドシステムによる旧世代との一括管理」「旧施設介護ソフトとのデータ自動同期」等から判断して、新型「眠りSCAN」に決定していきました。

今回導入に至った見守りセンサー型介護ロボット「眠りSCAN」です。

ほほえみで導入しました「眠りSCAN」は、昨年秋以降にリリースされた新型となっています。

その特徴として、今まで「眠りSCAN」が少し不得手としていた離床センサーとしての検知スピードの向上が挙げられます。

オプションにはなりますが、広範囲をカバーする離床センサーを追加導入でき、「眠りSCAN eye」といったネットワークカメラとの連動も可能です。

そして何より、今回一緒に導入しました「眠りSCAN」統括管理用クラウドソフト「眠りCONNECT」の登場によって、それまでの旧世代の「眠りSCAN」も含めて、睡眠データ、呼吸データ、心拍データなど、施設内の枠組みはもちろん、法人内事業所連携をも可能としています。

使用方法も至って簡単で、ご覧のようなアイコンがスマートフォンやタブレット等、手持ちの端末にお知らせ表記されます。必要に応じて、ネットワークカメラで室内の危険度を確認できるほか、生体センサーが心拍や呼吸を検知でき、その最大の売りであります睡眠の検知を可能にしています。

さらに今回は、この「眠りSCAN」がとらえたデータをほほえみで使用しております介護ソフトに、1時間おきに自動同期できる「ケアデータコネクト」というICTソフトも導入しました。

これによって、記録業務短縮の一助となっています。

そして、この新型「眠りSCAN」の試行的導入にあたって、準備のために作成した転倒転落スコアリングシートと、見守りセンサー型ロボット対象者アセスメントシートになります。

これにより、転倒危険度3段階に分けて見える化し、危険度によって、機器の機能の使用を生体センサーのみか可否を判断しています。

また、対象者の方を統一した基準で判断するアセスメントシートも作成し、これによって機器の過度な使用を行わないことなども意識づけしていきました。

さらに、職員の使用にあたっては、プロジェクトメンバーから使い方講習をすべての職員に実施しました。

ほほえみは職員の平均年齢が比較的高いため、このような機器の使用にあたっては、少しアレルギー反応のようなものがあったので、プロジェクトメンバーがその都度、不明な点を洗い出し、納得して使用できるように努めていきました。

機器の仕様を理解するために、新たにマニュアルとオペレーションを見直し、誰でも同じ基準で機器を使用した行動がとれるように、活用術として17ページのアクションプランを作成しています。

実際に表示されるアイコンの理解や、表示方法を見える化して、転倒危険度に合わせて表示されたアイコンの行動基準を決め、表示されたアイコンでどのように行動するか、基準をフローチャート化しました。

9つのステップ導入前期で大切にしたことになります。

導入前期では、課題の見える化を中心に、実際何に困っているのか。

現場のスタッフ皆、つまり組織間で、それが課題であるという合意形成がえられるということを探っていただくことが何よりも大切と考えました。

そして、それを解決できる打ち手としてのロボットの機能を考えていきますが、ここでも大切なことは、職員目線だけで進めない、誰にとつての課題かを重視することと考えています。

導入後期では、使用の定着のために一番必要な、小さな成功体験の共有が大切になります。

そのために、新たなオペレーションとして、判断基準を標準化するアクションプランを作成しています。

そのアクションプランの使用が定着し始めたところで、導入の成果を見える化するために、KPI、重要業務指標を測定しています。

とはいえ実際に機器の使用となると、以前のバージョンである「眠りSCAN」を使用したことがあるとはいえ、ネットワークカメラやスマホ端末との連携など、職員全員が使いこなすには時間がかかるだろうと思われました。

また職員から様々な意見や不満、不安が聞かれるかとも危惧していました。

そこで解決策として、機器に慣れることが重要と考え、使い方のレクチャーを繰り返し行い、職員皆がなれると同時に、機器を使い職員がどう動かせば標準化できるように、新マニュアルとして作成したアクションプランを使い、それをもとに、再度職員に直接機器が表記したアイコン等を受け取った後の動き方を伝え、その場で疑問質問に答えるようにしていきました。

様々な見える化を経て機器の使用定着のために大切になるのが、小さな成功事例の共有です。

ここまでのお話でおわかりになる方もいらっしゃると思いますが、新しいことを導入する時には、一時的に忙しくなり、期待値との相違で介護現場においてパフォーマンスが低下することが起こります。

私たちはそれをU字の法則と教わりましたが、使用した後に、現場のスタッフたちが自ら「使って良かった」という小さい出来事を共有していくことが、結果として、使用の定着に大変寄与していきます。

ではどのように実施したかですが、方法としては至って簡単です。

申し送りノートに使用した感想や不安など、様々な意見を記入してもらい、集めました。

こんなことでもいいんだと見本になるように、プロジェクトメンバーが率先して記入していききました。

皆の隠れた意見をしっかりと聞けるような機会を持つことこそが、とても大切なことだと気づくことになります。

そして、導入後期では、この小さな成功事例の共有こそが最も大切です。

先ほどのU字の法則の話で、現場においてモチベーションやパフォーマンスが低下した時に、小さな出来事でもいいので、成功事例を目に見える化することで、機器に対する見方も変わり、しっかりとした根拠が備わり、モチベーションが上昇していきます。

この成功事例や失敗事例を基にすると、マニュアルやオペレーションを随時更新していく必要性も感じられます。

では、この取り組みでどのような改善が見られたか。

ほほえみの課題からKPIを設定し、次のような5つの重要業績手法を測定しました。

まず初めに、インシデント発生回数についてです。

導入直後は、導入前に比べ発生回数は減少しましたが、2ヶ月目に入ってカメラの初期不具合による交換などもあって、少し増加しています。

その後カメラが正常に戻り、インシデントの発生回数も減少しました。

結果として、導入前3ヶ月と比較し、導入後3ヶ月では発生回数が38%減となっています。

続いて、夜間帯の訪室回数の比較です。

機器導入前は1夜勤で2ユニット合計平均80回ほど訪室していましたが、機器導入後は2ユニット平均64回ほどに減少が見られ、20%減となっています。

これは明らかに誤報による訪室の減少と考えています。

そして、勤務中の職員補総歩数ですが、ここに関しては顕著な変化は見られませんでした。

精神的不安軽減のアンケートも、身体的負担軽減のアンケート結果も一歩前進した結果と考えております。

ご覧いただいているスライドは、アンケート等で数値化できない職員やご家族からのリアルな意見です。

皆様々な考えを持ちつつも、ポジティブにとらえていただけたと考えています。

そして特にご家族様からの安心のお声は、導入してよかったと思えた点でした。

最後に、この事業について「ほほえみ」としてまとめさせていただきます。

漠然とした中手探りで始まったプロジェクトでしたが、課題の見える化により、居室内での転倒転落事故による入院者を減らすことを主目的として、機器の選定、スコアリングシートの数値化による対象者の選定と、根拠に基づいた流れを作ることで、方向性が明確になっていきました。

とはいえ進めていく中では、全職員への意識の共有の難しさもあり、機器の不具合等があると、職員の目がメリットよりデメリットに向く時期もありました。

ただ小さな成功事例を積み上げていくうちに、プロジェクトメンバーの思いが皆に届いていったようで、メンバー以外の職員も当初より音やモニターを気にすることも増え、今は手持ち端末を持つことが当たり前になっています。

設定の変更や機器の不具合への対応策の徹底、周知など、今後の課題も見えてきているので、アクションプランやマニュアルを活用し、今回のプロジェクトが、入居者様の生活の質の向上と安心安全な暮らしに役立つこと、を実証し続けていきたいと思えます。

以上で、グループホームほほえみの発表を終了させていただきます。
ご清聴ありがとうございました。

大極様ありがとうございました。

続いて、意見交換に移ります。
壇上のセッティングを行いますので皆様は少々お待ちください。

皆様お待たせいたしました。
それでは準備が整いましたので、始めさせていただきます。
本日も来場ご視聴いただいている皆様から事前にご質問いただいておりますので、これらをもとに進めて参ります。

ここからは本県が当事業を委託している 株式会社NTTデータ経営研究所 先端技術戦略ユニット HealthCare Implementationグループ長の足立圭司様に進行をお願いいたします。
それでは足立様、よろしく願いいたします。

はい、かしこまりました。
皆様こんにちは。改めまして、私はNTTデータ経営研究所の足立と申しまして、このスマート介護モデル事業のアドバイザーとして担当させていただいた会社のものでございます。

この時間はですね、3時半までお預かりいたしまして、実際に今ご発表を2施設の方にお話いただきましたけども、実際どんなこと

があったのか、本音のところなんかを、探っていきたいなというふうなお時間にしたいというふうに思っております。

それでは改めてですね、登壇される方をご紹介したいと思います。

自己紹介をお願いできたらと思います。

はい。

喜樂里さんからお願いします。

はい。

「グループホーム喜樂里」で管理者をやっております、松永と申します。

よろしくお願いいたします。

「特定非営利活動法人きらりびとみやしろ」施設長の廣木晴美と申します。

よろしくお願いいたします。

「グループホームほほえみ」で管理者をさせていただいております、大極春美です。よろしくお願いいたします。

はい。

「グループホームほほえみ」で介護係長をさせていただいております、後藤美香と申します。

よろしくお願いいたします。

はい、ありがとうございます。

今日は4人の方にご登壇いただきましたが、いずれの方も、この半年、8ヶ月ぐらいですかね、にわたるプロジェクトで中心的なところを担っていただいた皆様でございますので、早速いろいろ聞いていきたいというふうに思います。

まずはですね、プロジェクトが終わってみて、終わったといいますか一区切りついてみてってということでしょうかね、どんな感想を持ったかというところから、お話を聞いていきたいというふうに思います。

お1人ずつお願いいたします。

はい。

まず、率直にですね、本当に思い起こすと、いろいろと大変な時期を過ごさせていただいたなと思っております。

やっぱりですね、スケジュールっていうところなんですけども。

私自身も介護現場で夜勤もやっておりますし、シフトに普通に入ってるので、なかなかそういう中で、メンバーのミーティングっていうところがですね、なかなか時間を作ることが・・・

そこがとっても大変だったのかなと思います。

また、自分自身管理者ということもあるので、日々ですね、降りかかってくる、課せられた業務っていうんですかね、そういうものが、とめどなく入ってくるってところもありまして。

なかなか介護ロボットと、普段の自分の業務というところで、何て言うんですかね、頭の中ではフィフティーフィフティーでいつもいたいなっていう、そういう理想はあったんですけど、なかなかそこがうまくキープできなかつたのかなと。そんな感じがしました。

感想ですよ。アクシデントがつきものでしたね。

もういろいろ、通常の業務でも、日々、入居者さんの体のこととか、日によって変わるんですけども。

それ以外に、機器でもそうですし、その時に感染症の広がりとか、対象者が入院してしまったとか、その後どうしようとか、初めての経験だったので、その対応が大変だったと思います。

ただ、私は施設長という立場だったんですけども、職員と向き合う時間が以前よりも多くなって。

挨拶だけではなくて、この機器を通して、その職員の熱量というんでしょうか、以外な一面というのも見られたり、フットワークがすごいとか、そういうことも感じられたので、その点は大変よかったと思います。

ほほえみさんお願いします。

はい。

率直に、やっとこの日が来たといえますか、一区切りについて、凄くほっとしております、はい。

やはりですね、途中で発表でも申しましたけれども、やはりU字の法則というところで。

他施設の見学に行かせていただいた時などは「本当に入れてよかったと思いますよ」っていうことを言われたんですけども、その時は「本当にそうかな」と思いながらも、大変な時の方が勝っていて、**先行きの不安**なところもあったんですけども、今は本当に導入してよかったと。

やっぱり、その行った施設の方もおっしゃってたように、今はもうロボットがないのは考えられないっていうところを、自分たちが体験しております。

あとご家族様にちょっと、随時説明させていただいたんですけども、ちょっと転倒があった時に、「ロボットは反応しなかったんですか」っていうことをご家族様から言われまして。

意外に、なんかやっぱりご家族にもすごい期待されているとともに、やっぱり安心感に繋がっているんだなっていうところで、すごく私たち職員側もメリットですけども、入居者様ご家族様みんなにメリットがあったなということは、今すごく実感しております。

はい。

私自身も、やっと今日を迎えられたっていう、本当にその一言に尽きるかなと思います。

何かもう、漠然とした中ではなく、お尻を叩かれるような感じでスタートしたプロジェクトだったんですけども。

とはいえ、ここ8ヶ月ほどやっていく中で、プロジェクトメンバー間でいろんな話をしていって意識統一ができた中で、「やっていくんだ」という意識も芽生えましたし。

先ほど大極も言いましたが、今となっては、カメラがないのがとっても不安っていうような思いにもなりましたし。

あとは平さんを交えたミーティングの中で、いろんな見方を教えていただいて、「こういうこういう不満があったんです」「職員からこういう不満が出たんです」なんて言うと、「それは裏を返すと、職員さんがそれを、こなせてきてるっていうことと言えますよね」みたいな、こう違う見方の視点を教えていただくことが多々ありまして、自分自身の中でも、「あ、こういう見方もできるんだな」というところにも気づきを得ることができた、学びの場でもあったかなっていうのを実感しています。

はい、ありがとうございます。

今お話の途中で出てきた平というのは今年ですね、この2施設さんを担当させていただいた、弊社のコンサルタントということになります。

8ヶ月にわたって、2週に1回ぐらいですかね、ミーティングをさせていただいて、伴走的に支援させていただいたということになります。

4人の方ともですねやはり大変だったということが一番最初にあったと思います。

ただし、その上で、だけども学びも非常に多かったということなんですけども。

皆さんご承知のとおり、今後我が国はこういった、いわゆる生産性向上の取り組みですね、これを委員会を組成して、全国でどんどん加速してやっていこうということが、今、報酬改定なんかでも盛り込まれています。

非常に大変だったということですけども、ちょっと質問を変えて、やってよかったかどうか。

率直にどうですか。

そうですね。

これも一言。よかったです。

大変よかったと思います。はい。

やっぱりこう、一番最初に足立さんの方からいろんな説明を聞いた時にですね、やっぱりその介護ロボットって、慣れるにやっぱりすごく時間かかるっていうところなんです。

でも慣れると、やっぱりそれがないと不安になるというかね、困っちゃうよっていうような、そんな説明を受けたかなと思うんですけども。

実際導入がされてですね、今、始まってんですけど、やっぱりこれがないと困るなっていう、そういった印象があります。

とても僕はだから、よかったと思っています。

はい。

私もよかったと思っています。

なぜかという、自分の事業所だけで始めるのであれば、こうはいかなかったということがあったと思うんです。

それを適切にアドバイスして下さる伴奏者の方がいらっしゃって、もう本当に挫折というか、難しいかなと思う時でも、それこそお尻を叩かれるんじゃないですが、次はこうやろう、こうやろうっていうように、導いてくださったということは大変大きかったので、ここまでこれたと思っています。

ですので、よかったなと思っています。

はい。

私たちもよかったと思っています。

はい、ありがとうございます。

すごく大変だったけどやってよかったということですね。

この辺を今日後の時間で紐解いていきたいというふうに思います。

すごく大変だったけどやってよかった、っていう経験って、すごく貴重だと思うんですね。

そこにどういった試行錯誤や工夫、或いは葛藤ですかね、っていったものがあつたのかみたいところを、時間の許す限りお話を聞いていきたいというふうに思います。

まずプロジェクトの前ですね、今回のプロジェクトの前に、こういったロボットやICTなんかを導入するといったような、組織としての経験があつたのかどうかですね。

そういう下地があつたのかどうかですね、ここも大きな一つのポイントかなと思うんですが、2施設、いかがでしょうか、それぞれ。

はい。

グループホームの方では、特に下地というのは、なかったです。

もう、まるっきり初めての経験ということで。それについてはもう本当に不安の中、どうなるのだろうという、もうそのことでいっぱいでしたので。

もう初めてのトライということですね。はい。

はい、わかりました。

「ほほえみ」さんいかがですか。

はい。

令和3年度のロボット事業ということで、「眠りSCAN」を2台、入れさせていただいて使ってみました。

その「眠りSCAN」は上手に使えてたんですか。

そうですね、2台だけでしたので、どの方を使うかっていうところが、やっぱり体調不良の方とかっていうことで、変動していくことも多かったりしてはいましたけれども、何とか使っていました。

なるほど。わかりました。

この生産性向上の取り組みの時に、その、WiFi環境なんかが問題になることもよくあるんですけども、WiFiの環境は、もともとどんな感じでしたか。

はい。

当施設では、環境という点についてはですね、まだ整備されていませんでした。

デモを開始してから、これではいけないんだっていうことで、早速、補充することになったんですけど、その点についても、今回の取り組みの中で気づいた点でしたね。

WiFiの導入からやっていかなきゃいけなかったっていうことなんですね。

はい、そうなりますね。

はい。

「ほほえみ」さんいかがですか。

もともと「眠りSCAN」を使ってたということでWi-Fiはあったんですが、やっぱり今回導入するにあたっては弱いということで、増設するという運びになりました。

なるほど。

はい。

ありがとうございます。

そんな中でこの事業に応募されてですね、そして選考を勝ち抜いたわけですけども、どんなことがきっかけで、応募しようということに、組織の中でなったんでしょうか。

その辺を振り返ってみて、覚えている範囲で教えていただければと思いますが。

はい。

これについてはですね、もう長いこと、うちの施設では、夜勤が大変だということと、夜勤者が不足しているところ、これが

ずっと常に長いことあったんですね。

この話は、うちの理事長の方にも話が届いていたんですけど、理事長の方でやっぱりこの夜勤者の負担を、やっぱり何とかしなきゃいけないよねっていう、ところから、私が知らない間に、うちの理事長がですね、手を挙げてくださって、ホイホイ何かいろいろ話が展開されて、まとまってたっていうところで、そういう流れで始まりましたね。

理事長の鶴の一声というかご判断でスタートしたということですね。

「ほほえみ」さんはどんな運びでしたか。

はい。

同じ法人の特養の爽風館の方で、すでに導入していたこともあったので、そちらの方から、やはり効果とか、すごく使いやすくて、転倒転落の防止に役立っているという話も聞き、あと今後ICT化というのはやはりこの流れの中で、流れに乗り遅れてはいけないんじゃないかっていう、私たちの(思う)ところがありまして、実際、職員の負担軽減にもなるという話も聞きましたので、この機会にということで、はい、申し込ませていただきました。

「ほほえみ」さんの場合は、法人の中に、2年ぐらい前ですかね、に、すでにこの事業に参画されて、ロボットの導入なんかを一通り経験された先輩の方がいらっしゃるということだったということだと思いますけども。

そんな中で、これをやるよといった時に、職員の方の皆さんの反応、前向きな反応もあればそうでない反応もあったかもしれない。そういったところも本音ベースで教えていただければと思います。

まず「喜樂里」さんからお願いします。

はい。

思い起こしますとですね、一番最初に職員のみみんなにこの話をですね、紹介した時に、思い通りのリアクションというんですかね。何て言うんですかね、ちょっとシーンとしましてですね。「何だろう」という感じで、あんまりこう興味を抱いてるなっていうそういうリアクションじゃないんですね。

「こんな大変な今現場なのに、そこでまたこういう介護ロボットを入れて、大変なことになるんだ」というのが多分そんなような、皆さん気持ちになったんじゃないかなっていう。これは勝手に僕がそう受け取っただけなんですけど。

これについては正直、私自身がですね、正直なところ、乗り気じゃないというよりも、「いやあ、大変なことになったな」という、そんな気持ちがあったんで。

リーダーがこんなんでは駄目でしょうっていうところですね。気持ちを入れ替えまして。

これはもう絶対成功させるんだっていうところで、徐々にですね、気持ちもエンジンをかけてったんですけど、はい。

ただ、周りのスタッフを見てるとですね、やっぱりなかなかこう、慣れるまでにやっぱり時間がかかるんですね。

私自身もそれを感じましたし、これはもう本当に長い目で、頑張るしかないのかなっていうところで、やっていきました。

廣木さん、どうご覧なっていましたか。

そうですね。

面倒なことになりそうだなというような、何ですかね、気がこちらの方にも伝わってくるような状況でしたけれど、ただ、職場の合意みたいな形では、やっぱり「何でやるんですか。」「それは皆さんの、負担の軽減に繋がる、そこを考えてやるものです。メリットを考えて、先にあるものを考えてやっていきませんか」というような、お話の仕方をさせていただいた記憶があります。

はい、ありがとうございます。

目的を何度もご説明されたってことかなというふうに思います。

このプロジェクトをやる目的、その利益がどこに行くのかってことをですね、それを丁寧に説明されたんだろうなというふうに、プロジェクトの報告を受けて聞いておりました。

同じ質問を「ほほえみ」さんにもしたいと思います。いかがだったでしょうか。

そうですね最初に手を挙げました、「このプロジェクトに参加します」と言った時の、皆さんの反応は、「ふーん」という、まずそんな感じだったと思います。

で、やっぱりこう新しいことを始めるにあたっては、自分たちの今やってる業務に加えて、負荷がかかるってところに対する危惧っていうのは、皆さんたくさんお持ちだったので、最初のモチベーションやっぱ皆さん低かったし、さあやるんだって思ってた方はほとんどいなかったのではないかという気がしてます。

その中で、大極さん、大体空気が変わってきたというか、流れが変わってきたのは、手応えとしてはどれぐらいの時期ですか。

つい最近ですか。

本当に導入して、定着して、皆さんの方からスマホの置き場を決めてくれたりとか、スマホの持ち方を工夫してくれたりとかってところができて、やっぱりだんだんこう受け入れてもらえてるというか、皆さんが使いやすい、自分たちも使いやすくなってきてるんだなっていうのを感じたので。

最近ですかねえ、はい。それまではやっぱり試行錯誤というか。

なるほど。

いろんな不具合があったりとかもしたので、「壊れちゃってるの!？」みたいなところもあったので、機械なので万全ではないってところも、なかなか伝えていくことも、ちょっと時間が難しかったりとか。

「機械なんでしょう」みたいなところも自分も多分、実際逆だったらそう思ってたと思うので、機械が壊れることも不具合もあるっていうことを、伝えていくのもちょっと時間かかったりとか。

なるほど。

はい。

ロボットを導入され、実際にロボットを手にしたのは年明けからでしたか。
どれぐらいでしたかね。

昨年11月ぐらい。

そうするとプロジェクトが始まって3ヶ月4ヶ月ぐらいは我慢だということですね。

そうですね、はい。

なるほど。

はい、ありがとうございます。

プロジェクトがキックオフされて一番最初にやることは、そのプロジェクトのメンバー選びとかそういうことだと思うんですけども、メンバーはどのようふうに誰が選んでいきましたか。実際のところをちょっと教えていただきたいと思います。

「喜樂里」さんお願いします。

小規模な施設ですので、どうしても主要な常勤職員とか管理者がならざるをえないというか、ただその中で、日勤帯が多い人と、夜勤帯を担当する方を大体半々ぐらいで選ばせていただいて、プラスしてITに強いメンバー、あとは経理的な者。もう本当に、自分たちの仕事を抱えてる者が多いんですけども、そのメンバーでお願いするようにしました。

はい、ありがとうございます。

「ほほえみ」さんどうですか。

はい。

私たちの他にあと、相沢と後藤という男性職員2名で計4名なんですけれども、やはり男性の方が機器に強いんじゃないかというところで、あとユニットリーダー、両ユニットのリーダーをお願いしてその4名になりました。

大体簡単にどんな役割分担とかがあってあるんですか。

そうですね、マニュアル作りとか、あとアンケートづくりとかっていうのは、男性職員の方をお願いしたりとかして、あと私たちは利用者、他の職員さんの意見を聞くことだったりとか、あとわからないところを説明していくとか、そういった形で大まかに分担はしました。

なるほど。ありがとうございます。

この役割分担のところ「喜楽里」さんどうですか。

やはり現場に機器を使う、ということであれば、現場職員にお願いするのが中心で、我々はやはり書類を作ってみたり、情報の収集ですね、そういうふうに、分かれたところですよ。

はい、ありがとうございます。

いろんな役割分担の仕方があるとは思いますが、その施設にあった、メンバーの多さなんかもいろいろ変わってきますでしょうし、その施設に応じた、メンバー役割分担ということが一つ工夫のし所なのかなというふうに思っています。

それでメンバーが組成されてですね、走り出すと一番最初にやるのは、課題の見える化ですね。

集合研修でやりました。

どんなことをやったか簡単に教えていただいて、或いはどんなことが分かったのか、印象に残っていること中心で結構ですので教えてください。

「喜楽里」さんからお願いします。

はい。

先ほど発表の中でも紹介したんですけども、見える化ということに対して、気づきシートに各スタッフにいろんな手を書いていただくんですね。ムリなこと、ムダなこと、ムラなこととかね。

その辺をいろいろ思い思い感じていることを書いていただいて、その辺をピックアップしてですね、課題として、上げていったんですけども。

やっぱり、何て言うんですかね。介護職身体的な負担。あと、その辺が一番なんですけどね。その辺というところで大体が意見がまとまってきたのかなとは思っていますね。

はい、ありがとうございます。

因果関係図で何か気づいたことあれば教えてください。「ほほえみ」さんお願いします。

因果関係図で気づいたことですか。

そうですね、皆さん大体職員の思いが、当時やっぱり転倒転落という事故が多かった時期ですので、そこに対する不安だったりとか、そういったところへの、どうしたらいいんだろうみたいな意見が多かったような気がします。

なるほど。

職員の方が普段仕事の中で考えておられるようなことが、形になったということかなというふうに思うんですが、そういった職員の方が普段考えておられるようなこと困りごと、気づいていることとかですね。そういったものが見えるような形になるっていうことは、普段の現場の中であるんでしょうか。

ここはどうですか。「喜樂里」さんどうですか。

普段の現場から。

そうですね。こういった因果関係のような分析がなければ、なかなかそういったところって見える化されないんじゃないかなと思うんですがどうでしょうか。

確かに、そうでした。

普段なかなか、例えば定期的な会議っていうのも月に2回は必ず行ってるんですけどもね、なかなかそういう時間の中で、話がそういう方向に行くってことは、なかなか今までなかったのかなと思います。

やっぱり普段、いろいろ各々ですね、いろんな不安や、もしくは負担を抱えていると思うんですけどね、なかなかそういうのを口に出すという、そういう機会もなかなか正直、なかったのかなってところで、そういった意味では、今回のこのプロジェクトの中で、いろんな洗い出しができたっていうところはすごくよかったのかなと思いました。

はい、ありがとうございます。

課題が見える化され明確になった、その課題に対して、適切なロボットを選定していったと言う事ですけれども、ロボットを選ぶにあたってのポイントっていうのは、どんなことを大事にして選定されましたか、これを2施設に聞きたいと思います。

「喜樂里」さんどうですか。

はい。

これは私の方ではほぼ選定させていただいたんですけど、でも、4社の方から選んだんですね。

先ほどの発表の中でも申し上げたんですけども、いろんなカタログ、インターネットを利用して、いろいろと情報を収集しました。

その中で一つ、僕の中でこだわったのがですね、いろいろ介護ロボットって今出てるんですけど、その中でも、やっぱりちょっと、価格っていうところもちょっとポイントとして挙げてみたんですね。

同じぐらいの価格帯で、どれぐらい機能がこう差があるのかなっていう、その辺がすごく気になってですね。結果的には4つのデモを行ったんですけど、大体同じ価格帯で、選んだんですね。

その中でも、今回やっぱり「aams」が一番印象としてよかったので、そこら辺は私の中でちょっとこだわって、価格帯っていうところで選んでみました。

はい、ありがとうございます。

「ほほえみ」さんいかがでしょうか。

はい。

各社いろいろやっぱり、メリットデメリットがあるので、私たちが一番優先したいところはどこかっていうのを、プロジェクトメンバーで話しまして、反応速度というところに、みんなの意見が一致して、カメラの広さとか、いろんな利点もあったところもあったんですけども、やっぱり反応速度を一番重視しようということで決めました。

はい、ありがとうございます。

選ぶポイントを絞ってですね、様々な機器から情報収集して、いろんな選択肢の中から選定していたと。

いざロボットが入ってですね、想定外だったようなこともあったかと思うんですけども、考えてもいなかったようなことかかってあれば、覚えていれば教えていただきたいんですが、ありましたか。

はい。

これ本格導入の前の話でも大丈夫ですかね。デモをやっている時。4つの介護ロボットをお試しで入れてる中でですね、こんなのがありました。

アラートが鳴るんですけどもね。そのアラートの音がですね、たまたまだったと思うんですけども、うちの施設の玄関のチャイム音と全く同じだったんですね。

全く同じ、おなじ音だったんで、ある時ですね、そのデモが入ってる間に、実はね、玄関が鳴ってたんですね。玄関のチャイム音だったんですけど、けどスタッフは、入れたばかりのデモ機から発生したアラート音じゃないかってことで、あたふたして、大変なことになったという、そんなこともありましたけどね。

なるほど。試行的にやっぱりデモとして入れてみないと分からないことですね。

はい、ありがとうございます。

「ほほえみ」さん何かありますか。

うちは、導入後なんですけども、カメラが2台突然映らなくなったりしたりとか。

あと、「眠りSCAN」が移動できるので、入居者さんの体調に合わせてたりとか、あと入れ替わりがあった際に移動して使うんですけども、その時に、映像と名前が一致してなかったりとか、そういったところで結構、トラブルというか、困った点がありました。

なるほど。

はい、ありがとうございます。

やっぱりロボットを導入しますと、予想していなかったことも、まま起こるものですね。

そういったものだと思ってロボットを入れて、期待値をコントロールしておかないと、失敗してしまったとかですね、或いは導入してもかえって手間が増えたっていうことになって、途中で止めてしまうということになりますので、そういったものだというような心構えも一つ必要なかもしれないと思って聞いておりました。

ロボットが導入されるというところまでやっていきましたけども、いよいよ時間がなくなって参りましたのでちょっと、最後に一つ質問させていただいて終わりたいというふうに思います。

これは、そうですね廣木さんと、大極さんお2人にお伺いしたいと思いますけども、こういったプロジェクトを進める上でですね、今後、或いはこのモデル施設を真似して、自分のところでもやってみようと思う方に対してのメッセージという意味合いもあるんですけども、プロジェクトを進める上で最も大事なこと、振り返ってみて大事だったなと思うことって何でしょうか、教えていただければと思います。

廣木さんどうですか。

はい、そうですね。

当方は初めての挑戦ですし、やっぱり性格的に私はちょっと待ての方なんですけど、やってみなければわからないっていうところがあるので、まずは体験しましょうって思います。

その点で、皆さんにも、お勧めしていきたいなと思います。

はい、まずはやってみるってことを大事にするってことですね。ありがとうございます。

大極さんどうでしょうか。

はい。

やはり、必ず効果があるということを信じて、そこを信じるのが大事だと思います。

先ほどのプレゼンの中でU字の法則に触れられておりましたけども、やっぱり試行錯誤の過程があるので一旦は効率なんかは下がるけども、必ず効果が出てくるよっていうことですね。そこを信じて頑張るってことですね。

はい。とても大切なことだなというふうに思いました。

時間がここにきてしまいましたのでこれで終わりたいと思いますが、今後ロボットや生産性向上の取り組みというのは日本全国的に普及して参ります。

埼玉県については、4年間にわたりですね、こういったモデル事業所というところを培って参りましたので、そういったところに見学なんかも今後も受け入れていただけるというふうに思いますので、そういったリソースも使いながらですね、この生産性向上とか、ロボットのICTの導入といったものをみんなで盛り上げていくといいますか、加速させていければいいなというふうに思います。

はい、今日のご清聴ありがとうございました。

足立様、そしてモデル施設の皆様ありがとうございました。

ご降壇お願いいたします。

最後に事務局より、本県が実施している生産性向上に関する事業をご紹介します。

高齢者福祉課では今年度スマート介護施設モデル事業以外にも、介護ロボット普及促進事業及びICT導入支援モデル事業を実施しております。

介護ロボット普及促進事業では、介護ロボットを導入する際の経費の一部を助成しております。

ICT導入支援モデル事業は、モデル事業所に対し、導入費用の一部を助成し、ICT機器を活用した効果的な業務改善を普及させる事業となっております。

現在、令和4年度までのモデル事業所の成果報告をホームページに掲載しております。

「埼玉県 介護 ICT」と検索すると、「ICT(介護ソフト タブレット等について)」と出ますので、そちらからぜひご覧ください。

また、来年度の事業についても4月以降、要綱等を掲載する予定ですので、ぜひご確認ください。

続きまして国が実施している取り組みとしまして、介護分野における生産性向上ポータルサイト、また介護サービス事業所における生産性向上に資するガイドラインというものがございます。

介護分野における生産性向上ポータルサイトには、生産性向上に係る情報が集約されておりまして、取り組みに活用できるツール等をですね、ご案内しております。

またですね、介護サービス事業における生産性向上に資するガイドラインでは、実際の事業所の取り組みの事例やその手順が掲載されております。

事業所としてですね生産性向上に取り組む際に、ぜひ参考にしていただければと思います。

以上をもちまして本日のプログラムは終了となります。

この後ですね、メールにてアンケートをお送りいたしますので、回答にご協力いただきますようお願いいたします。

またZoomにてご参加の方には、QRコードにてご案内しております。

お手持ちのスマートフォン等でご回答いただけますので、ご協力をお願いいたします。

本日はご参加いただき誠にありがとうございました。

会場にお越しの皆様はお忘れ物がないようご注意ください。

ありがとうございました。